



Since 1972.2.24

帯広西ロータリークラブ

4

2009, APRIL

第1804回例会

平成21年4月2日



会報

THE ROTARY CLUB OF OBIHIRO WEST
Weekly Report

<http://www.tokachi.co.jp/wrotary/>



2009年4月

ロータリー雑誌月間

会 長	越智 孝佳	広報委員長	久保 且佳
副 会 長	太田 万也	広報副委員長	堂山 啓太
副 会 長	神田 龍一	委 員	安原 明彦
幹 事	石原 英樹	委 員	飯田 正行
会 計	高田 晃一	委 員	横田 幸宏
S A A	佐々木和彦	委 員	上垣香世子

エコカップの回収に協力して下さい

世界の子どもたちにワクチンを届けよう!



会長報告

会長 越智 孝佳



皆さん、こんにちは。会長報告を申し上げます。
ここ数日の新聞、テレビの報道を見ておきますと、景況の悪さばかりが目につきます。中々、好転する兆しは見えてきません。重い空気は相変わらずといったところです。

新聞といえば、昨日の北海道新聞の夕刊に“ばんえい競馬”の新しい取り組み構想の記事がでておりました。ご覧になった方もいらっしゃると思います。メインタイトルが「ばんえい競馬市街地へ」となっておりました。市と運営会社が企画し、ソリの代わりに二輪車を引っ張り、コース延長して帯広駅までレースを行い、モナコの公道レースに並ぶ帯広の名物にするというものです。先々週に、ばんえい競馬の調教師の谷様をゲストにお迎えしたところでしたから、すぐに目に留まり記事を読んでいました。大胆で素晴らしい企画だと思いつつ、先に目を落としていったところ、「エイプリルフール記念」で実は少々？マークがついていたのですが、最後までしっかりと読み込んでしまいました。昨日4月1日はエイプリルフール…最後の最後で、この記事はすべて冗談です…のくだりで、心地よい苦笑いをしていました。

ただ読み終えて感じた事は、このくらい大胆な発想の転換は必要であるという事です。100年に一度の経済危機の最中、私達は会社の運営をしていかなければなりません。これくらいの柔軟な発想と、取り組みは必要な事かもしれません。西ロータリークラブも、3年後には50周年を迎えます。その過程で、ガバナーを輩出する大仕事も待っております。私達も大胆で、柔軟な心をもって挑んでいきたいと思っております。

以上で、本日の会長報告と致します。有難うございます。

たいまつ宣言

この「たいまつ宣言」は創立30周年にあたり、西ロータリークラブの創立の心を知るところから発し、我々が未来へ向けての道標とするものである。たいまつのように我々の行く道を照らし、明るい未来へと導くものである。

- 1.我々は 垣根のない交流を目指し 友情の輪を拡げる
- 1.我々は 他に依存することなく 自らを発する
- 1.我々は 常に変革をもって 行動する
- 1.我々は 自己の研鑽の為に 真の奉仕を実践する
- 1.我々は 生涯現役であり 活動に引退はない

出席状況報告

月/日	2/5	2/18	2/26
例 会	1797回	1798回	1799回
総会員数	70名	70名	70名
計算に用いる 出席数	64名	64名	64名
ホームクラブ出席	48名	43名	42名
メークアップ総額	11名	16名	17名
欠 席 者	5名	5名	5名
出 席 率	92.2%	92.2%	92.2%

ニコニコ献金

4月2日 8,000円 累計 313,000円

今月の主な行事

4月 2日 誕生・結婚祝
9日
16日
23日
30日 夜間例会



点鐘越智孝佳会長

開会宣言

国歌斉唱

ロータリーソング（四つのテスト）

たいまつ宣言唱和

ゲスト紹介

北海道新聞帯広支社報道部長 高田正基様

4月結婚祝

太田万也会員	1970. 4.12
堀修司会員	1973. 4.29
笹井祐三会員	1976. 4.23
森 賢伸会員	1977. 4.16
佐々木嘉晃会員	1982. 4.25

4月誕生祝

河合健一会員	1932. 4. 3
岡田武稔会員	1938. 4. 1
笹井祐三会員	1944. 4.27

パースデーソング

乾杯

(会食)

会長報告



会務報告

①帯広北・帯広東・音更RC合同夜間例会開催のご案内

- 日時 平成21年4月15日(水)午後6時
- 場所 十勝川温泉観月苑
- ・帯広北RC、4月10日(金)の繰下げ例会といたします。
- ・帯広東RC、4月14日(火)の繰下げ例会といたします。

ニコニコ献金

内海二司会員

クリニックのロビーでエコキャップチャリティーコンサートをしました。キャップ2,286個集まりました。本日トータル6,299個持ってきました。
長女が大学を卒業し、歯科医師の国家試験に受かりました。
結婚祝いありがとうございます。遅くなりましたが、ニコニコします。

久保且佳会員 広報委員会、本日担当例会です。よろしくお願ひします。

プログラム

広報委員会 久保且佳委員長

北海道新聞帯広支社報道部長 高田正基様

【新聞斜め読み】

本日の演題は、新聞斜め読み。新聞作りの裏側

などをお話して皆様に新聞について親しんでもらえればと思います。

最初に、最近の新聞の業界の情勢について説明します。

ご承知のように世界不況の中で新聞業界も大変な状況に陥っています。新聞の収入の二大柱は、広告と販売です。理想は、その割合が5対5と言われています。今は、広告が6対4です。その柱の広告収入ですが、前年比2桁の落ち込みです。北海道新聞もその例外ではなく、全国紙、地方紙、業界全体がそうです。道新の場合は今期の広告の売り上げが、ほぼ30年前の水準です。それくらい激しく落ち込んでいます。幸い、それまで企業としての体力を蓄えてきているという点もあって、会社としてもそれをできるだけ食い潰さないように社内の合理化、賃金の抑制などいろいろな取り組みを真剣に始めているところですよ。

広告がなぜ落ち込んだかという1つは、広告主の方が広告出稿を控えるということですよ。それぞれの企業が、このような不況の中で、経費削減努力として広告を減らす。もう1つは、広告媒体の比重が変わってきているということですよ。かつては、新聞、テレビ、雑誌が広告の三大媒体でした。それが今は、インターネットが急速に伸びてきています。

北海道新聞では、まだインターネットの事業が大きなシェアを占めていないので、その売り上げは大きく占めていませんが、広告業界ではインターネットの伸びは凄まじいものとなっています。こういった広告主の新聞離れの状況に底が見えてこない中で、企業、広告主の皆さんにどうやって新聞の魅力あらためて知っていただけたら良いか、各新聞社は悲観苦闘しているところですよ。

販売収入については、広告ほどではありませんが右肩下がります。北海道新聞も、ピーク時は朝刊で125万部でした。それが3月末で、118万部です。7万部程減ってきています。背景には不況でもなく、読者の皆さんが、朝夕刊セットで3,925円の新聞代を中々払えないということ、もう一方少子化で人口が減って、若者の人口も減ってそして若い人達が新聞を読まなくなってきたという時代の趨勢があります。私は、大谷短期大学の非常勤講師をしています。最初に短大の学生さんに新聞を取って読んでいるかと聞きました。しかしほとんどいませんでした。彼らは、何に情報を探しているかと携帯、パソコンのインターネットなどのモバイル情報です。それで十分だと学生さんは言います。こういう時代だからこそ、読んでもらえる、読む価値がある新聞にしなければならぬという努力をしているわけです。

少しLPRさせていただけるとすれば、新聞の信頼度は各種調査でダントツです。新聞に書かれていることについて読者の皆さんは、それなりの高い信頼をおいてくださっています。

それを支えているのが、新聞記者という仕事です。北海道新聞は1,500人位いますが、編集系は600人位です。600人の内、外に出て取材をする記者、外勤記者は450人位です。東京に70人位、外国にも10人位位置しています。北海道内にも40人近い記者が支社、支局、本社、全道各地に取材網として張り巡らされて日々取材をしています。インターネットを飛び交っているいろいろな不確かな情報と比較して、遙かに精度の高いものと自負しています。尚かつ人間が作るものですから間違いを犯します。新聞の隅々に載っている「訂正」が減るように努力しています。いろいろな読者が新聞社に対していろいろな要求を求めています。そういう要求に100%答えるのはなかなか難しいですが、それに少しでも近づくと、信頼を持って読んでくださるという努力を私たちがしているということご理解していただきたいと思います。

新聞の仕事についてお話をさせていただきます。先ほど紹介していただきましたように私は、昨年まで東京駐在で論説委員の仕事をしていました。主に社説を書く仕事です。新聞社には、報道という機能と論説という機能があります。その論説の機能の柱なわけですよ。それを支えているのが論説委員です。北海道新聞には、論説委員は最高責任者の論説主幹以下15人がいます。今の論説主幹は、鹿追町出身の人です。東京に6人、残りが札幌です。札幌の論説委員の中には、朝刊の朝の専任が1人、夕刊のコラムが1人、その他に札幌と東京に副主幹というそれぞれの実務上の責任者がいて、それを除く論説委員が日々担当をもって社説を執筆しています。先ほど、社説は社としての言論機能の柱である

中山廣雄副SAA

中山廣雄副SAA

越智孝佳会長

親睦活動委員会

柳沢一元委員長

高田新一会員	1984. 4.15
天野清一会員	1990. 4.22
若林 剛会員	1991. 4.20
神田龍一会員	1993. 4.24

親睦活動委員会

柳沢一元委員長

渡部省一会員	1947. 4. 5
中島久司会員	1948. 4. 1

大沢 剛会員

越智孝佳会長



石原英樹幹事

と申し上げましたが、つまり社論を書いているわけです。北海道新聞社の主張を展開しています。

これは、担当論説委員の主張ではない。ということを知っておいてほしいと思います。北海道新聞の場合は、東京と札幌のそれぞれの論説委員が毎日電話会議で打ち合わせをしてその日のテーマを決めて論旨を決めるという形で、最終的に担当論説委員が社説原稿を執筆します。場合によっては、高田という人間がそうは思わないけれども社論としてこう主張するということは間々あることです。幸い自分の考えと社論が大きく乖離することはないです。最終的に原稿を書くのは一人の論説委員ですけども、それはあくまでも論説委員室の合議で決められるものだという事です。

新聞記事に戻りますけども、新聞記事には色々な原稿があります。社説、コラム、一般的なニュース原稿などそれぞれ原稿のスタイルは違います。しかし基本的に共通していることがあります。それは、突き詰めて言うところ5WH、いつ、どこで、誰が、なぜ、どうした、どのようになっている、ということですよ。紙面で求められているものは、2つあります。

1つは、新しいW、ワース、価値ですね。そこで報じられているものの意味とか位置付けみたいなのを求められています。もう1つは、ソーホット、それでいてどうなるんだという見識とかか見識とかか求めてられるようになってきています。それからもう1つ欠かせない情報の1つに、ハウマッチ、いくらなんだということが読み手の大切な情報になってきます。このように新聞記事に求められているものがものすごく幅広くなってきています。

ここでもう1つ共通しているのが、客観主義です。新聞の読み手、メディアの受け手として建前として色々なところで耳にされてきていると思います。私も新人の頃から客観的に書き、事実を書けと言われてきました。それはその通りだと思いますし、今も若い記者にそのように指導しています。もう少し原点に立ち返って考えてみると、本当の客観報道とは何なのか、ありうるのかという疑問にも立ち至るのです。物事には色々な側面があります。たとえば赤い色であっても、見様によっては黒く見えるときもあります。新聞の1つの役割、客観報道の意味するところはできるだけたくさん色を読者の皆さんに提示する、その判断材料を提示するという事です。ただ新聞が100通りの見え方があるとしてもそれをすべてカバーすることは難しいです。それは、組織の規模や記者の頭数、物理的制約の問題、毎日の紙面の制約などの問題もあります。その中で何色を選ぶかというところで記者の主観が必ず働くわけです。その意味では、かきカッ付きの客観主義といえます。逆を言えば、取材する新聞記者の目、視点等が問われているのです。その見方が独善的であったり公平性を欠いていたりすれば、必ず読者からソッポを向かれるということになります。言い方を変えれば、新聞記者を育てるのは読者の皆さんであるという言い方もいえると思います。

話は戻りますが、昨年の10月に札幌で新聞大会が開催されました。新聞、テレビの全国の会社が加盟している新聞協会という組織があるんですけども、年に1度の全国大会です。札幌で久しぶりに開かれて、北海道新聞がホストとして色々な受け入れの準備をしました。講演の講師として同志社大学の浜矩子(はまのりこ)さんが講演されました。印象に残ったところに、良きジャーナリスト、良きエコノミストの条件とは何かということをお話されました。そこで浜さんは、3つの条件をあげられました。独善的(自分だけが正しい)と思っている)であること、懐疑的(自分以外の人間は皆、間違っている)であること、執念深い(絶対敗北を認めない)、この3つであると言われました。ある意味、先ほど私が言っていたのと逆を浜さんはおっしゃったということですよ。つまり、性格が悪くないとジャーナリストは動かないということなんですけれども。私自身ある意味、深い核心をついた言葉とも受け取りました。この後に浜さんは、こんなことをおっしゃっています。独善的で、懐疑的で、執念深い人間が発する言葉は、荒れ野で叫ぶ声だということです。荒れ野で叫ぶ声とは、聖書の言葉だそうなんです。荒れ野で叫ぶ声、つまり反体制の声、反骨の声、体制に対する怒りの声だ。私は、後で詳細な講演録を聞いて励まされました。

ここで浜さんが言われた反体制、反骨、これこそ新聞が互版の昔から脈々と受け継がれた、血ともいえるものです。浜さんからあらためて教えられるような気がしました。ただそう言ういつも独善的であってはならないという思いは私の中で持ち続けています。そのバランスの問題ではないかなと思います。

次に新聞の特種について話をさせていただきます。私は、特種には2つあると思っています。1つは、いわゆるスクープで事件を抜く、あるいは不正、悪を暴くという特種があります。これは、たとえば北海道新聞がこの特種を書くとおかたのメディアは後追いせざるを得ません。これは、この仕事を業として選んだ人間の本性みたいなものとなってしまふことがあります。スクープを書いたときの快感やこの特種のためならどんな苦労もおしまないといった感じで、それはそれで大変な大事な仕事です。

私は、若い記者にも言うんですけど、決して他社は後追いをしないかもしれないが、高田なら高田という記者がいたからこぼれ世の中に伝えられる話があるだろうということですよ。それは目の覚めるスクープではないけれども、一人の記者が一人の人間によってはじめて伝えられる出来事、もう少し具体的に言えば人間一人一人の生き方というカタマリみたいなものです。一人一人の人生、生き方どうやって光を当てることができかねないか、これもまた人間に問われる、見識であり力量であり眼力であると思います。これも新聞の大事な役割だと思います。先ほど北海道新聞に外勤で取材をしている記者が450人いると言いましたが、私は若い記者にこういう言い方をします。「君たちが1年に1本そういう記事を書けば1日1本以上、毎日そういう記事がなるんだぞ」と。これは、読者にとって魅力的な新聞になるとも思います。簡単に出来るという難しい作業になりますが、そんな新聞を作りたいと思います。新聞社の人間がどんな気持ちで新聞を作っているかという一端を知っていただければ幸いです。

最後に最近、私の胸に突き刺さった記事がありますのでそれを紹介させていただきます。これは、たぶんあらゆる新聞記者、新聞社に働く人間に共通して伝えなければならぬ、受け止めなければならぬ記事だと思って紹介させていただきます。

3月6日に奈良県で読売新聞の配達員の女性が列車にはねられて亡くなるという事故がありました。この翌日の読売新聞の朝刊の編集手帳というコラムに、こういう文章を書いています。「配達員のバイクで転倒し、落ちた新聞を拾い集めていたときの事故という。読者に早く届けねば、その一心で拾ったのだから。線路上に散乱した新聞には編集手帳も載っていた。命を掛けて拾ってくれたあしたかさん(亡くなった女性)の霊前で恥じることもないのこもった記事であったかどうか…」その傍に「警察の捜査ミスに追及の筆を走らせつつおまえさんは机の前で偉そうに批判ばかりしているね、ともう一人の自分の声を聞く。」私はこの読売手帳を読んだときにズキンとききました。

実は、その3月31日の朝日新聞の新聞斜め読みという池上彰さんのコラムがあります。池上さんは、この編集手帳のコラムを引用しています。池上さん自身もグサリと突き刺さったということですよ。こういう新聞の配達員は全国にいます。北海道新聞にも各販売所に朝早く、夕方、雨の日も雪の日も新聞配達をしてくださっている人がいるのです。池上さんは、「その人達の苦勞に恥じることもないのこもった文章を私は書いているのだろうか。自宅で新聞が読めるのもあしたかさんのような人達の苦勞があってこそ、そういう苦勞が報われるような文章を自分は書いているのだろうか」こういうふうにも締めくくっています。

開会宣言

点鐘

中山廣雄副SAA

越智孝佳会長